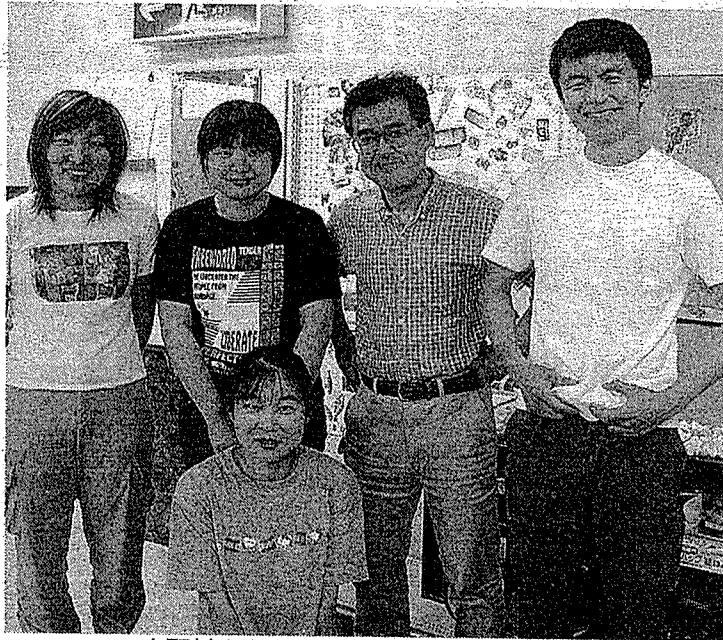


# 教育改革に取り組み NPO法人ライズ理事長

## 小野村 哲さん(43)

「今の学校で対応しきれない子どもが学べる学校があってもいい」  
十六年間の中学教師の職を離れ、二〇〇〇年四月、不登校の児童・生徒をサポートするフリースクールを運営する法人格を持つ民間

# 「地域立学校」目指し



小野村さん(右から2人目)とスタッフ

6)814301をつけば市内に指定させ、「地域立学校」を目指し奮闘している。生徒も少なくなかった。

つくば市や旧妻崎町で英語を教えていた。生徒たちと全力で向き合ってきた授業は「最高に楽しかった。問題を抱えながら生徒自身も努力していた。悔

「学校をすべて否定しているんじゃないやありません。教育改革イコール学校改革という、学校だけに問題があるとする考えもおかしい」

「D」など一人ひとりのやり、決意した。「自分の第二相談室をつくらせ」事務を引き受けてくれた。知らない人へのスタートだった。知人や勤務先に問題を抱えた生徒たちが集まる「第二相談室」があった。熱心な先生が多く、時間を割いては相談室で生徒たちの勉強をみていたが、出張や会議で十分な時間の確保は難しく、「教室復帰」を

その知人に声を掛け、共感で、市内外から小中学生と通信制の高校生の十人前後が通う。「居場所だけではだめ。ここから巣立つても、どこにもいけないのでは無責任」と、教科の授業だけでなくスポーツや美術、パソコン、調理など活動内容を充実させている。

でも、何をやるかは子どもたちに任せ「決めたことはやりなさい」が基本姿勢。だから「何もしなさい」授業もある。「エネルギー



# 「不登校」と向き合う元中学教師

が回復しないと何かやろうという気持ちも出てこない」  
運営費の財源は月謝と民間財団の助成が中心だが、厳しいという。月謝は週四日通って四万四千円。元同僚からは「高くて勧められない」と言われる。

だが、マンツーマンで一時間当たり五百円だ。大半のスタッフは交通費だけで、自身も夕方に教える英語教室の収入の三分の二を運営費に回し、公務員の妻が生活費の大半を負担している。親の負担も考えると、行政が助成して「公設民営学校」として学校複線化を進めるべきだと考えている。

スタートから四年目。話さなかつた子が、通って来るうちにいい表情を見せ、勉強でもぐんぐん伸びる。そんな子どもたちの変化と成長する姿が活力であり、喜び。  
「学校が成功しても仕方がない。子どもたちが父親や母親になって幸せですとつぶやいたのはここ」  
(飯田 克志)